

# SHOW HEY シネマルーム

## Data

監督：ジェームズ・マンゴールド  
製作：キャシー・コンラッド  
原作：エルモア・レナード  
出演：ラッセル・クロウ/クリスチャン・ベイル/ピーター・フ  
オンダ/ベン・フォスター/  
グレッチェン・モル/ダラ  
ス・ロバーツ/アラン・テュ  
ディック/ローガン・ラーマ  
ン/ケヴィン・デュランド/  
ヴィネッサ・ショウ

## 3時10分、決断のとき

2007年・アメリカ映画  
配給/シナジー・122分

2009(平成21)年6月29日鑑賞

東映試写室

## 👁️👁️ みどころ

久々に、クリスチャン・ベイル扮する善玉と、ラッセル・クロウ扮する悪玉の2枚看板による、重厚な西部劇を堪能。逮捕された強盗団のボスを護送する旅の中で生まれる人間ドラマと男同士の不思議な絆とは？本作のテーマである男の誇りと男の生きざまを、深く静かに考えたい。ちなみに、ドラマ性豊かな本作(?)とシンプルな人間ドラマに徹した(?)1957年の旧作との対比は？さらに、また二転、三転する本作のラストと、これまたシンプルな結末(?)の旧作との対比は？そこまで極めれば、あなたの3時10分の決断はプロ級……。

## 2枚看板による重厚な西部劇に感激！

本作はラッセル・クロウとクリスチャン・ベイルの共演、そして第80回アカデミー賞作曲賞、音響賞の2部門にノミネートされ、スティーブン・キング選出2007年度ベストムービー第7位の作品だが、07年08年中に日本では公開されず、やっと09年夏に至って公開されることになったが、それはなぜ？それはきっと西部劇はヒットしない、との判断によるものだろうが、私は久々にみる重厚な西部劇に大感激。

といっても、本作は早撃ち競争や派手な銃撃戦ではなく、退役軍人で今は小さな牧場を営んでいる、善良だがいろいろと悩みを抱えるダン・エヴァンス(クリスチャン・ベイル)と多額の懸賞金の懸かった強盗団のボス、ベン・ウェイド(ラッセル・クロウ)との人間ドラマが注目点。ウェイドが意外にあっさり逮捕されてしまうシーンは少し肩すかし気味だが、そのウェイドを裁判所のあるユマまで連行し、裁判にかけて「つるす」ことに執念

を燃やすのが、再三ウェイドに襲われて多額の被害を受けていたサザン・パシフィック鉄道のグレイソン・バターフィールド（ダラス・ロバーツ）、そして、コンテンションの町にある駅からユマ行きの列車にウェイドを乗せるための護送役を200ドルの報酬で引き受けたのが、ダン・エヴァンスだ。したがって本作の原題は『3:10 TO YUMA』。



(c) 2007 Yuma, Inc. All Rights Reserved.

## テーマは、男の誇り、男の生きざま

人間には善玉と悪玉がある（？）が、善玉の男は魅力的で悪玉の男がそうではないかという必ずしもそうではないから面白い。ヒース・レジャー演じた『ダークナイト』（08年）のジョーカーは姿カタチも心の内もすべて悪玉だったが、手塚治虫の原作を映画化した『MW - ムウ - 』（09年）で玉木宏が演じた結城が「美しき悪のヒーロー」と呼ばれたことをみても、それは明らか。つまり、悪玉でも魅力的な男がいっぱいいるわけだ。

本作で2枚看板が演ずるテーマは、ズバリ男の誇り、男の生きざま。ダンには南北戦争で北軍兵士として従軍中に片足を負傷し、わずかな補償をもらい今は小さな牧場を営んでいるが、干ばつが続く借金が増えるばかり。しかも鉄道を敷く計画が持ちあがったため、地主はダンたちを立ち退かせるべく地元の悪党のタッカー（ケヴィン・デュランド）を使

ってある日あこぎな手段を決行。そんな負け犬のような生活を容易に転換できないダンと妻のアリス（グレッチェン・モル）は優しく見守っていたが、長男のウィリアム（ローガン・ラーマン）はいつもイライラ。したがってエヴァンス家にとって、父親の尊厳は目下ゼロ。

それに比べれば、早撃ちの神の手をもつという強盗団のボス、ウェイドは強盗団としての活動方針が麻生総理のようにブレず一貫していたから、右腕のチャーリー・プリンス（ベン・フォスター）らの信頼も厚く、えらくカッコいい。ちょっとキザな感もあるが、それも男の魅力を増幅？したがって酒場の女エマ・ネルソン（ヴィネッサ・ショウ）が、「かつて劇場で歌っていたのを見て知っている」と言われて、すぐにウェイドにメロメロになったのは当然？もっとも、かなりの犠牲を払って駅馬車から強奪した札束を仲間たちに分け与えた後、長居は無用とばかりにチャーリーたちがメキシコへ逃げようとしたのに、エマとの濡れ場のためにウェイドが1人町に残ったりあっさり捕まってしまったのは意外。こりゃ、ちょっと油断が過ぎたのでは？

本作はこの点と後半のクライマックスで片足を負傷しているはずのダンが急に全力疾走する点が難点だが、それは男の誇りと男の生きざまを描く本作の本質的問題ではないから、あえて無視・・・。

## 護送団の面々は？

逮捕したウェイドを3時10分発のユマ行き列車に乗せるべく、コンテンションの町の駅までウェイドを護送する任務をリードするのは、サザン・パシフィック鉄道のバタフィールドだが、彼についていくその他の護送団員はダレ？危険を承知でダンが200ドルの報酬で護送団員を買って出たのは、「カネのためなら何でもやる」という感じで、あまりカッコいいものではなかったが、旅の途中でウェイドとの間に不思議な心の絆が生まれてくる(?)から、やっぱり人間何でもやってみるもの？

その他護送団に積極的に参加し護送団の先頭に立つのは、まず駅馬車を護衛中ウェイドたちに襲われ、拳銃で撃たれながらもダンに助けられ、さらにはじめて人間の身体から弾丸を抜いたという獣医のドクター・ポッター（アラン・テュディック）のおかげで九死に一生を得た賞金稼ぎのバイロン・マッケルロイ（ピーター・フォンダ）。地元の悪党のタッカーも報酬目当てで参加したが、獣医のドクター・ポッターまでご指名を受けたのはちょっと気の毒。

こんな面々でウェイドの護送団が編成されたが、ウェイドが逮捕されたと知ったチャーリーたちがボスを奪い返しにくることはまちがいない。果たして、こんな弥次喜多コンビの延長みたいな面々でチャーリーを出し抜き、無事3時10分発のユマ行き列車にウェイドを乗せることができるのだろうか？息子のウィリアムが父親についていくと主張したのは意外だったが、ダンがそれを拒否したのは当然。しかし、護送団の面々が苦勞を重ねる

中、遅れて彼らに合流したウィリアムは次第に大きな役割を果たすことに。

## コンテンション到着までに、一波乱も二波乱も

本作は1957年にデルマー・デイヴス監督がつくった『決断の3時10分』のリメイクだが、旧作をネットで調べてみるとつくり方が全然違うようだから、興味ある人は本作と対比してみればより面白いのでは？たとえば、旧作ではウェイドを護送するのはダンともう1人だけらしいし、その道中のドラマはほとんどないようだ。

しかし本作では、キャラ豊かな護送団が構成されたため、逃亡をはかろうとするウェイドと護送団とのさまざまなトラブルが描かれ、その中でまずパイロンが、次にタッカーが殺されていくから、第1にそんな内部抗争に注目。第2は、チャーリーからの襲撃を避けるためアパッチ族が住む近道をあえて選んだために生じるトラブル。そして第3は、中国人たちが動く鉄道敷設工事現場を仕切るドーン保安官らとのトラブルだ。こんな一波乱も二波乱もある旅の中で遂にドクター・ポッターも命を失ってしまうが、そんな苦難を何とか乗り切っていく中、ダンとウェイドの間には何とも不思議な絆が生まれてくることに。

本作では、そんな護送の旅の中で生まれてくる不思議な男たちの誇りと生きざまを、クリスチャン・ベイルとラッセル・クロウの演技によってじっくり堪能したい。そしてまた、この護送の旅の中でダンとウィリアムとの父子の絡みをみていると、「かわいい子には旅をさせよ」のこゝろにも十分納得できるはず？

## ハイライトシーンは、あなた自身の目で

やっとウェイドを護送してコンテンションに到着した護送団だが、生き残ったのはリーダーのバターフィールドとダン、ウィリアム父子だけ。3時10分発のユマ行きの列車の到着が遅れているらしいから、やむをえず一行は町の保安官たちと共にホテルの1室に身を隠したが、そこにボスを奪い返すべくチャーリーたちが到着したから大変。さらに、チャーリーは護送団をやっつけた者には賞金をやると町の男たちを焚きつけたから、もはや護送団は絶体絶命？

そんな中、ウェイドはダンに対して「千ドルやるうえ命の保証をするから、俺を解放しろ」ともちかけたから、さあダンはそれにどう返事？私ならきっとそれに乗るはずだが、ダンはなぜかそれを拒否。それはなぜ？

それが本作のポイントだ。拒否は単なる男のやせ我慢？男のプライド？男の美学？いやいや、きっとそうではないはずだ。そんな本作のエッセンスとなる男同士の問答をじっくり楽しみながら、命を懸けた2人の男のホテルからの脱出シーンをしっかり確認したい。そして、距離は短いチャーリーやそれを応援する町の男たちからの銃弾が降りそそぐ中、2人は無事駅まで到着することができるのだろうか？そんなハイライトシーンは、あなた自身の目でしっかりと。

## 意外な結末の賛否は？

コンテンションのホテル内やそれを脱出した後の「攻防戦」も、本作と旧作は全然違うらしい。第1に大きく異なるのは、旧作でウェイドが提示する条件は1万ドルらしいから、本作でウェイドが千ドルにケチった(?)のは一体なぜ? 第2は旧作ではダンの妻アリスがホテルを訪れ危険なことから手を引いてくれとダンに懇願するらしいが、本作ではそんな女々しい(?)シーンは一切なし。そんな新旧比較はきっと面白いはず。

また、本作ではダンの息子ウィリアムが牛たちを暴走させるという機転を利かせてくれたため、ダンとウェイドは無事ユマ行きの列車に乗り込めそうになるのだが、ここでダンの身に一波乱が。さらにその後、あっと驚く第2、第3の大波乱が待っているから、その展開と結末をしっかりと確認したい。ちなみに、この結末も本作と旧作は全然違うらしいが旧作の結末は?

ちなみに、本作についての「速報 シネマグランプリ 選評」で西脇英夫氏(映画評論家)は「単純明快なストーリーだが、相変わらずよく出来ている。ただし、ラストシーンは前作のほうがはるかにいい」と書いているから、気になる方は旧作と見比べる必要があるのでは?

2009(平成21)年7月4日記

### 「60歳の手習い」は継続中!

60歳の手習いで、09年4月からNHKラジオ講座『まいにち中国語』を中心として中国語会話の勉強を始めたことは、『シネマ22』のコラムで紹介したが、それから早や8カ月。10月からは『まいにち中国語』の講師も一新したが、所詮これは入門編。そこで、私が新たに応用編として平行して始めたのが『アンコール まいにち中国語』の勉強だが、こりゃ難しい。しかし、中国語は「発音很難、語法比較容易」(発音は難しいが、文法は比較的易しい)。また60歳の私には、毛丹青氏・佐藤晴彦氏共著の『珠玉の中国語エッセイで学ぶ 長

文読解の“秘訣”が言うように、音を聞いただけで中国語がわかるという「感性的認識」は無理だが、中国語の構造、仕組みを理解し、「こうこうこうだからここには名詞を使えない、動詞しかこない」という「理性的認識」は得意? そうだとすると、この「応用編」は文法の解説が豊富だから、私にはピッタリ。そう思っただけでかなり分不相応な教材で日々悪戦苦闘しているが、さて『シネマ24』出版までには私の中国語レベルはどこまで到達? こうなりゃ「中国語検定4級」への挑戦も射程距離?

2009(平成21)年11月5日記